

東大見学会（2025.7.28～30）

東大見学会は2005年に始まり、コロナの時期以外は毎年開催してまいりました。今年も関係する皆様の絶大なご協力により、実施することができました。以下は参加した教員（生物担当）のレポートです。

本校では「本物の学問に触れる」ことをコンセプトとして、本校OBの教員や学生など、東大関係者の皆様の多大なるお力添えをいただきながら、「東大見学会」を毎年、夏休み前半に実施しています。本校の高1・2年生が東大で先生方のレクチャーを受け、研究室を回って研究の実際を体験し、現役学生からその勉学や生活のありさまを直接学びます。本年度は11の研究室とOBが勤める法律事務所にご協力いただき、本校生徒67名が2泊3日で参加しました。

7月28日、全国各地に帰省していた生徒が東京に集合しました。昼食後、一班10名ほどのグループを作り、6名の本校OBの東大生に本郷キャンパスを案内してもらいました。その後、新世代感染症センターでウイルス学の研究をされている浦木隆太客員准教授に「将来なんて、今は分からなくていい」というタイトルで講話をいただきました。ご自身の高校生の頃の話や学生時代の話、海外で研究員を務められていた話から、最先端の研究の話など、多岐にわたりながらも、大変分かりやすく生徒の気持ちにも寄り添った内容でした。「いろいろな人と関わることが財産になる」とおっしゃったことは、今回の東大見学会の一つの指針ともなりました。生徒も熱心に話を聞いていました。

夕食後、現役東大生のOB数名を招いて自分の学生生活についてお話しいただき、その後、生徒を数グループに分け、OBを配して、学生生活や勉強のことなどいろいろな質問に答えていただきました。生徒諸君は活発に発言、質問し、OBも親身に対応してくれて、終始和やかな雰囲気でした。

7月29日。午前中は医学部、東洋文化研究所、マーケットデザインセンター、工学部建築学科から、午後は国際高等研究所新世代感染症センター、地震研究所、理学部物理学科、文学部から、それぞれ一箇所ずつ生徒に見学先を選んでもらい、見学を実施しました。生徒たちは施設や実験の様子を見学し、熱心に話を聴いていました。質疑応答の際に東大の先生も驚くような鋭い質問をぶつける生徒もいて、私たちの教え子ながら「さすが」と感心させられました。

夕食の時間には、東大第2生協食堂をお借りして、本校OBとの交流会を行いました。立食パーティ形式で、社会人を含む20名以上のOBが、生徒とたくさん話をしてくださいました。生徒とOBはもちろんのこと、世代の違うOB同士でも交流を楽しんでいました。

7月30日。工学部（松尾研）、生産技術研究所、総合文化研究科、「アンダーソン・毛利・友常法律事務所」から一箇所見学先を選び、見学を実施したのち、解散しました。

どの見学先でも、一般の見学会では見せていただけないような施設を見学させていただきました。専門分野をもつ本校理科教員も初めて見るような機械や、通常なら立ち入りが制限される区域まで見学を許可してくださり、生徒はもちろんのこと、教員も知的好奇心を掻き立てられました。これを機に生徒諸君がますます勉学に積極的に向き合ってくれることを期待します。

本校の東大見学会の特徴は多くのOBの協力で支えられていることです。また、多くの卒業生が東大のみならず各界の第一線で活躍しているからこそ、このような大規模な見学会が実施できているということ、見学会の準備を通じて強く感じ、ご協力くださった皆様への感謝の念を新たにしております。





東大構内をOBの案内で見学



浦木先生の講話



OBとの交流会で、数名のOBがスピーチ



OBを囲んで座談会



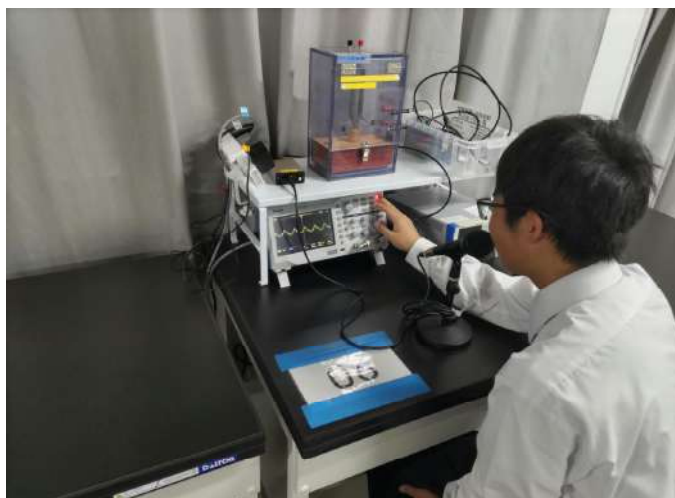
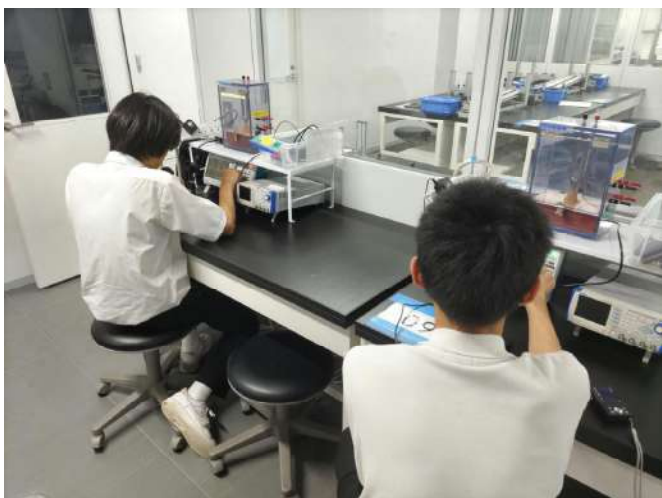
地震研究所で剥ぎ取った地層の説明



地震研究所で観測機器の説明



東大国際高等研究所新世代感染症センターにて。座学とラボ見学



工学部松尾研究室にて



アンダーソン・毛利・友常法律事務所にて（上と右）

